

報告 2：永野和茂（立教大学・院）

「1965年カッチ湿地紛争と印パ国際関係」

1947年インド・パキスタン分離独立以来、両国は国家の境界の問題において長らくライバル関係にある。例えばカシミール紛争は、分離独立直後から繰り返し争われてきた印パ両国家にとっての長期的な領土紛争である。しかし、両国間の領土問題は歴史的にある種の緊張状態を持続的に喚起してきたが、必ずしも戦争状態の極度の緊張が常時継続されてきたわけではない。むしろ印パ関係の緊張と緩和の時期があり、その意味において、例えば1965年秋の第二次印パ戦争の様に両国間の緊張の高まりが全面戦争へ発展した場合もあれば、同年春のカッチ湿地紛争の様に全面戦争へと発展する前に停戦が実現した場合もあった。

本報告では、印パ両国の境界地域であるカッチ湿地において1965年春から6月にかけて生じた一連の紛争に着目する。まず、従来あまり注目されることのなかったカッチ紛争自体の全体像を描き出し、紛争がどのように展開されたかについて検討する。また、紛争研究においては主に印パ紛争の原因が注目されてきた一方で、なぜ全面戦争へ発展しなかったのか、紛争がなぜ防がれたのか、その条件は何かという点は十分には注目されてこなかった。これらの関心からここではカッチ紛争における緊張と緩和の印パ国際関係を検討していく。

カッチ紛争が全面戦争に発展しなかったのには複数の要素があった。まず、湿地の地理的条件から長期の戦闘継続は不可能であった。次に、印パ両国は互いの国内事情もあり相互に紛争の責任を非難し合う事で、第三国の介入、特に印パ両国に軍事的経済的影響力を持つ米国を自国に有利な条件で引き込むという外交的な戦略を模索していた。米国は直接的関与を敬遠したものの、代わりに英国の仲裁役の関与を支持し、英国の国際的な関与の下で印パ両国の停戦交渉が展開された。従って、湿地の地政学的問題、印パ国内政治の影響、国際的な紛争仲裁の役割等の諸要素が合わさり戦火拡大が防がれる要因となった。